

| | |
|--------|---|
| 研究課題 | 音楽科における探究的な学びを実現する際の効果的な ICT の活用について |
| 副題 | ～様々な「つながり」の場面を設定することを通して～ |
| キーワード | 音楽科、探究的な学び、日本の伝統音楽、民謡、創作と鑑賞の関連 |
| 学校/団体名 | 国立大学法人広島大学附属三原中学校 |
| 所在地 | 〒723-0004 広島県三原市館町二丁目6番1号 |
| ホームページ | https://www.hiroshima-u.ac.jp/fu_mihara |

1. 研究の目的

本研究では、生徒がこれまでの人間の営みと音楽との関連（生活が音楽に与える影響や音楽が生活に与える影響）を探究的に学習することを通して、音楽を構造理解と価値理解を往還する学習として再構成することを試みた。特に、ICTを活用しながら「既習事項とのつながり」「友達とのつながり」「教材とのつながり」「テクノロジーとのつながり」の4つの『つながり』を意図的に設計することで、生徒の思考がどのように変容・深化するのを実証的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究の背景と問題意識

中学校学習指導要領（平成29年告示）では、音楽科において「音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成」が求められている。また、AIによる音楽の生成技術が発展する中、音楽の人間の側面への理解や批判的思考の必要性など、人間のもつ感覚へのアプローチや音楽をその背景の文化とともに味わうことなど、音楽を文脈として捉えることの重要性が提唱されている。特に我が国や郷土の伝統音楽を扱うことは、生徒にとって身近な文化の理解や主体的な音楽活動につながる重要な学習内容である。しかし、実際の授業においては、伝統音楽が様式理解や歴史的知識の習得にとどまり、生徒の現在の生活や感覚と結び付いて実感的に理解される場面は必ずしも多くはない。

民謡は、生活・労働・祭礼など具体的な営みと密接に結び付いて成立してきた音楽である。伊野（2014）は郷土民謡学習が文化への帰属意識を高めると指摘している。またクリストファー・スモール（2011）は音楽を「Musicking」という概念で捉え、人々の関係性の中で行われる行為そのものに意味があると論じた。これらのことについて学習指導要領中学校音楽編には、「人々の暮らしとともに音楽文化があり、そのことによって様々な特徴をもつ音楽が存在していることを理解することである。その理解は、自らの音楽に対する価値意識を広げ、人類の音楽文化の豊かさに気づき、尊重することにつながっていく。」と記載されている。さらに、実際の生活と結びついた文化としての音楽を体験しながら、ICTのもつ以下の3点の強みを生かし、授業実践を行った。

①即時的な自己内フィードバックによる推敲の深化

作曲ツール (flat for education 以下 flat と記載する) を用いることで、生徒は旋律を即座に

再生し、音として確かめながら修正を繰り返すことができる。これにより、試行錯誤しながら音楽を構成する過程を保障することができる。

②音階理解の転移を支えるツール

律音階や都節音階、琉球音階をあらかじめ授業者が入力したものを各自が再生し比較することで、知識として学んだ日本の音階を「〇〇のような感じ」といった感覚と関連付け、実感を伴った理解へつなげることができる。また、ICTの活用は、5音からなる日本の音階の理論理解と創作実践とを媒介する橋渡しの役割を果たすと考えた。

③共有と他者からのフィードバックによる対話的学習の活性化

完成途中の作品を共有し、他者から感想や意見を得ることで、生徒は自分の創作意図と実際の表現とが一致しているかを見直す機会を得ることができる。また、完成した作品はmp3データをQRコードに変換し、創作のよりどころとなった写真とともに各自がGoogleスライドにまとめることで、視覚的情報、生徒の工夫の記述、音楽とを一体として鑑賞することが可能となる。その結果、作品の意図や表現の特徴を他者と共有しながら理解を深めることができると考えた。

本研究における4つのつながりについては、以下のように整理した。

①既習事項とのつながり

学びの連続性に着目し、生徒がこれまでに学習した内容や生活経験を現在の授業に関連づけられるよう、ポートフォリオや過去の作品・学習記録をLMS上で振り返ることができるような環境を整える。

②友達とのつながり

協働的な学びを推進するため、生徒の意見や記述などについてLMSを通して共有し、リアルでもデジタルでも相互に友達の意見を知ることができるような学習環境を整備する。

③教材とのつながり

学習の個別性に対応するため、教材や教材に関する資料などを家庭でもアクセス可能な形でLMS上にアップロードし、生徒が自分のペースで繰り返し視聴・体験できるようにする。

④テクノロジーとのつながり

flatやオンライン共有ツールなどのテクノロジーを活用し、生徒が音楽における人間らしさや創造性について自ら問い直す学習を設定する。

本研究では、探究の過程（課題設定→比較・分析→考察→表現）を軸に題材を構成し、例えば、民謡の学習では「人はなぜ歌うのか」という答えが複数ある問いを設定した。また、各授業後の振り返り、単元後のレポート、創作作品を分析対象とした。

3. 授業の実際

本報告書では、(1) 日本の民謡の学習（鑑賞領域）と (2) 日本の音階を使った創作（表現領域）の題材（合わせて7時間の授業）について述べる。

(1) 日本の民謡の学習（鑑賞領域）全4時間

第1時：民謡との出会いと課題設定

複数の地域の民謡を鑑賞し、授業の初めに「なぜ人は歌うのか」という問いを提示した。歌詞や背景を提示し、生活と音楽との関連を考察させた。教師が ICT を用いて音源比較する学習を行い、生活のどのような場面で音楽が使われてきたのかなど、民謡と生活との関連を意識させた。

第2時：『三原やっさ節』と『牛深ハイヤ節』の比較

本校のある広島県三原市の民謡『三原やっさ節』とその民謡のもとになったといわれている『牛深ハイヤ節』（熊本県）を民謡歌手による歌唱指導を受けながら歌ってみることで、その違いについて体験を通して理解する学習を行った（図1）。



図1 民謡歌手による指導

第3時：『牛深ハイヤ節』から伝播した民謡の比較

町田（1967）は、民謡の伝播論を唱えている。熊本県天草市の民謡『牛深ハイヤ節』が北前船に乗って北上し、口頭伝承していく中でフシが変化するというものである。この伝播論に基づき、『牛深ハイヤ節』をルーツにもつ、『佐渡おけさ』『塩釜甚句』を比較鑑賞した。また、生徒はオンライン共有ツール「ふきだしくん」(<https://477.jp/>)を使用し、オンラインで交流を行った（図2）。



図2 ふきだしくんの記述

第4時：生活と音楽との関連についての再考

「人はなぜ歌うのか」という問いに再び向き合い、『南部牛追い唄』『五木の子守唄』などの曲の背景や曲想が深く関連している民謡を鑑賞しながら、生活と音楽との関連を再度考え、民謡の学習のまとめとした。

(2) 日本の音階を使った創作（表現領域）全3時間

第1・2時：風景をもとにイメージを拡げ、日本の3つの音階を試す中でイメージと音楽を関連付ける

フォトアーカイブサイト「Find/47」(<https://find47.jp/>)で提示されたたくさんの風景の写真から1つ選択し、そこから聞こえてきそうな音や音楽を想像した。また、律音階・都節音階・琉球音階のもつ響きについて、flat を使って音を出して試しながら（図3 次頁に掲載）、そのイメージと合致する音階を律音階・都節音階・琉球音階の中から選択し、音と音とのつながりを

試すなど、民謡の学習で学んだ日本の音楽らしさとのつながりを意識させた。また、5音の音階から選択して創作する創作のプロセスを学習した（♩=80と設定しているが、テンポは生徒が自由に変更できるものとしている）。

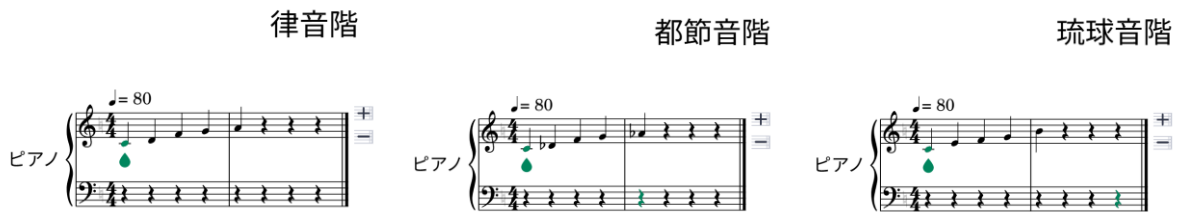


図3 律音階・都節音階・琉球音階が入力された flat の画面

第3時：発表と相互評価

生徒は作品を mp3 データで書き出し、オンラインツールを使って、QR コードに変換した。また、実際に創作の意図のよりどころとなった写真と創作の意図を掲載した Google スライドを作成した（図4）。また、生徒はその Google スライドを見ながら作品を鑑賞した。友達の多様な表現に触れ、感想を Google Forms で回答することで、意見を集約し、それぞれの生徒にフィードバックすることにつながった。



図4 生徒 C（後述）の作成した Google スライド

なお、QR コードリンクは一定期間を過ぎると読み込めなくなるので、生徒の音楽作品を Google drive で共有する (<https://x.gd/1CBTs>)。

4. 生徒の記述分析より

全ての授業の終わりに振り返りを Google Forms で実施した。また、民謡の1時間目の授業の前に、生徒の実態を把握するためのアンケートも実施した。さらに、全ての授業が終了したのちに、民謡についてのレポート課題を Google ドキュメントで課した。それらの記述について、すべて回答が得られた生徒 (N=35) について、テキストを分析した。

(1) 人はなぜ歌うのか という問いについて、授業の前後での生徒の記述の比較

共起ネットワークを図5・6のように生成し、共起回数を分析したところ、以下のア・イのように分析した。

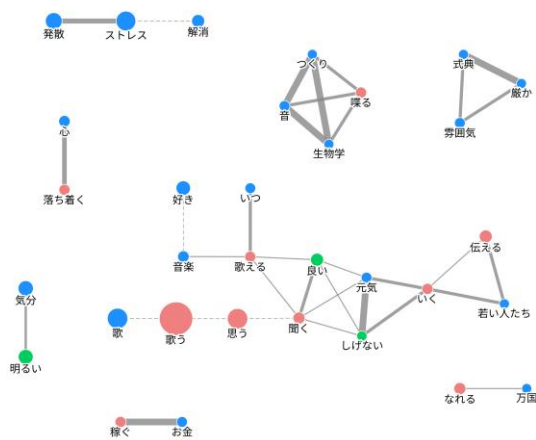


図5 共起ネットワーク
(授業前)

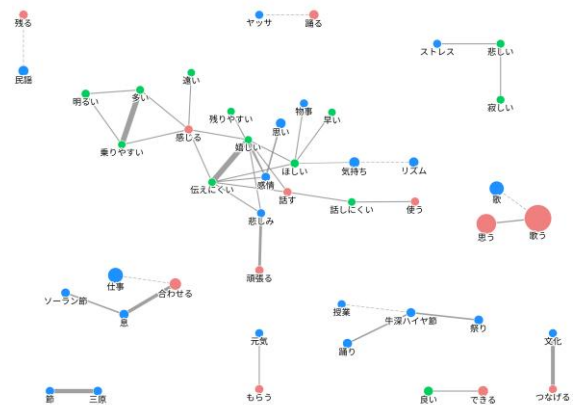


図6 共起ネットワーク
(授業後)

ア、授業後における語の共起構造の特徴

授業後の自由記述を対象に共起分析を行ったところ、語のネットワークは「歌う」を中心とする構造を示した。特に「歌う—歌 (23)」「思う—歌う (23)」「仕事—歌う (17)」などの高頻度共起が確認され、生徒の記述が「歌う」という行為を軸として再構成されていることが明らかになった。さらに、「仕事」を中心とする語の結びつきが顕著であり、
仕事—歌う (17) 仕事—歌 (13) 仕事—思う (11) 仕事—合わせる (10)
などの高頻度共起が確認された。これらの語の結びつきは、生徒が民謡を単なる娯楽ではなく、生活や労働の場面に埋め込まれた実践として理解していることを示唆している。なかでも注目されるのは、①・②のような「仕事」を中心とした結びつきである。

① コアとなる結びつき

仕事—歌う (17)、仕事—歌 (13)、仕事—思う (11)、仕事—合わせる (10)

これらの高頻度共起は、生徒が民謡を「生活や労働の場面に埋め込まれた実践」として理解し

ていることを示す。とりわけ「仕事—合わせる」という結びつきは、歌が作業の呼吸や動作、リズムを同期させる機能を持つという認識の形成を示唆している。すなわち、歌を娯楽としてではなく、労働を支える装置として捉える視点が獲得されていると考えられる。

② 補助的であるが、重要な結びつき

仕事—伝える (7)、仕事—紛らわせる (6)、仕事—気持ち (4)

これらの共起は頻度としてはコア群より低いものの、学習の質的深化を示す語である。「伝える」は、歌が地域の歴史や仕事の意味を継承する媒体であるという文化的理解を示し、「紛らわせる」「気持ち」は、労働の苦しさや不安を軽減する心理的機能への気づきを表している。したがって、授業後の共起構造は、歌＝仕事を支える機能（同期・効率化）歌＝文化や歴史を伝える媒体 歌＝情動を調整する心理的装置 という多面的理解へと拡張していることを示している。

イ、授業後の語の共起ネットワークの構造的特徴

以上を総合すると、授業後の語の共起ネットワークは、「歌う」を中心に、

- ①仕事・生活文脈
- ②理由・意味づけ（思う・理由・良い）
- ③身体的同期（合わせる・息・リズム）
- ④地域文化（祭り・踊り・地名）
- ⑤心理的機能（紛らわせる・気分転換）

へと枝分かれする構造を示している。これは、歌を「楽しいもの」とする単一的理解から、「社会的・文化的・身体的・心理的機能を併せ持つ実践」として説明できる段階へと認識が発展した可能性を示唆するものである。

5. 生徒の創作作品の分析より

授業の中で、写真をもとにイメージを膨らませ、日本の音階をもとに音楽作品を創作した。振り返りの記述やまとめのレポートの記述を分析し、以下の理由から3名の生徒を抽出し、その作品を分析した。本研究では、①歌うという人間の営みについて授業の中での認識の転換が明確であること、②生徒Aは音楽構造と社会的機能を結びつける理解が促進されているのに対し、Bは歌を「メディア」として捉える視点が深まり、Cは歌を文化として捉え、他の文化と比較するなど学習成果の異なる側面が記述の中で見られたこと、③共起分析の結果、授業の前と後で、「仕事」「伝える」「合わせる」「地域」「踊り」などの結びつきが強くなったが、この3人も同様の特徴が見られたことから、A～Cの3名を抽出した。生徒A～Cは表1のように作品について記述している。

表1 生徒A～Cの作品についての記述

| 生徒 | 選択した写真 | 使用した音階 | 写真からイメージした音楽の雰囲気 | 作品をつくるうえで工夫したこと |
|----|---------------------|---------------|---|---|
| A | 新潟県 北沢浮遊 選鉱場跡 | 琉球音階& 都節音階 | <ul style="list-style-type: none"> ・怖い感じ ・化け物が出てきそう ・星のキラキラした輝きの音 ・寒い感じの音 | <ul style="list-style-type: none"> ・写真の中に見える、暗い夜や建物（遺跡）が光で輝いているところ、また古びた建物（遺跡）から感じる怖さなどを2つの音階を繰り返すことで表現しました。 ・2つの音階で写真の中の光と闇を上手に表現しました。 |
| B | 青森県 弘前公園 の夜桜 | 律音階 | 涼しくて穏やかな音が聞こえそう 綺麗なひがいて周りの人が見てそう 舞妓さんみたいな江戸時代の夜みたいな感じ | 最初から、ざっと騒がしい感じの夜で舞妓さんみたいなきれいな人が歩いていそうだからその人に注目しているように最初から強くゆっくりとしたリズムにしたり日本の楽器である琴を取り入れたりしてみた。 |
| C | 福島県 さざえ堂 | 都節音階 | <ul style="list-style-type: none"> ・不思議な音 ・連符が聞こえそう 素早く細かい音→緊迫感のある ・平太鼓や楽太鼓のような大きい響き ・越天楽よりも祭りに近いような感じの音楽 ・平太鼓や楽太鼓のような大きい響き ・越天楽の曲よりか祭りに近いイメージ | メロディーはフルートと、所々に尺八を使いました。連符はグロッケンが高く響く、透き通った音で、不安感や緊迫感をもたせました。太鼓は5種類使い、賑やかなお祭りをイメージして、さざえ堂の色味や雰囲気、札の文字の字体を表現しました。また、三味線の少し不気味かつ響きが少ない音も使い、不思議さを出しました。 |

※生徒Cは2つの作品を創作したが、紙面の関係上、1つの作品のみ取り上げている。

生徒A～Cの中から、紙面の関係上、生徒Cの選択した写真と作品のみを示す（図7・8 図8は次頁に掲載）。



図7 生徒Cの選択した写真

The image shows a musical score for a piece by student C. The score is written for a variety of instruments and includes a tempo marking of $\text{♩} = 80$. The instruments listed are: フルート (Flute), 箏 (Harp), 尺八 (Shamisen), 三味線 (Shamisen), グロッケンシュビール (Glockenspiel), 長胴太鼓 (Taiko), フロアタム (Floor Tom), ジングルベル (Jingle Bell), Flk. (Flute), 箏 (Harp), Sh. (Shamisen), 三 (Shamisen), Glk. (Glockenspiel), 長胴太鼓 (Taiko), Fl Tom (Floor Tom), and Jgl. Bl. (Jingle Bell). The score is divided into two systems, with measures 1-4 in the first system and measures 5-9 in the second system. The notation includes various rhythmic patterns, including triplets and complex rhythmic figures.

図8 生徒Cの創作した作品

生徒作品について、(1) 作品の特徴 (2) 既習内容との関連 (学習内容がどのように作品に表れているか) の2点を以下のように述べる。

(1) 作品の特徴

本作品は、三連符の反復と旋律の上昇・下降構造によって、螺旋状の空間を音楽的に表現した作品である。三連符の持続的な運動感は、回転しながら上昇していく感覚を生み出し、旋律の段階的な上昇と下降は、建築内部の回遊的構造と対応している。すなわち、生徒は視覚的な空間構造をリズムと旋律の運動として置き換えることで、音楽的構造として再構成していると考えられる。

(2) 既習内容との関連 (学習内容がどのように作品に表れているか)

本作品には、民謡の学習で扱った旋律を反復するという構造や都節音階のまよりの理解が表れている。三連符の連続的使用や同型リズムの変化は、民謡に見られる循環的構造の応用とも考えられる。また、段階的な旋律進行は、音階の特徴を踏まえた構成であり、学習した音楽概念が創作に生かされている。さらに、音の動きと空間イメージを結び付けて構成している点から、鑑賞で学んだ音楽要素と情景の関連が具体的な作品として表れている。

6. 本研究の成果と課題～4つのつながりの場面を設けたことを中心に～

本研究において、生徒の民謡や日本の音楽への理解は、個人的・感覚的理解から社会的・構造的・文化的理解へと質的に深化したと考えられる。授業前の記述には、「楽しいから」「ストレス発散になるから」といった個人の感情に基づく説明が多く見られ、歌を個人的娯楽として捉える傾向が確認された。しかし授業後には、「仕事で息を合わせるため」「祝いの場を盛り上げるため」「地域の歴史や思いを伝えるため」など、歌が共同体の中で果たす社会的・文化的役割に着目した記述が増加した。さらに、「リズムが一定だから作業に適している」「囃子が多いことで集団性が高まる」といった、音楽の構造と社会的機能を結びつけて説明する記述も見られ、感覚的な印象から構造的な理解へと発展していることが確認された。

この深化は、4つのつながりが相互に関連しながら働いた結果であると考えられる。まず教材とのつながりによって、民謡の背景や生活の中での文脈を知ることによって、歌を社会的存在として捉える視点が生まれた。次に友達とのつながりにより、「似ていると思っていたが違いがあった」「なぜ（この民謡が）広まったのか」といった対話を通して自己の理解が揺さぶられ、問いがさらに深く生成された。さらにテクノロジーによる意見の可視化は、自分の考えをクラス全体の中に位置づけ直す契機となり、理解の広がりや変容を自覚するメタ認知を促した。そして既習とのつながりによって、雅楽や日本音階との比較を通し、「日本らしさ」といった抽象概念を形成する段階へと進んだと考える。すなわち、教材の理解が他者との対話で再構成され、テクノロジーで客観化され、既習知識と統合されるという循環的な構造の中で、生徒の理解は多面的・構造的なものへと深化したのである。

以上の結果から、音楽を生活文化の文脈の中で捉え、ICTを媒介として多様な「つながり」を設計することは、生徒の音楽理解を多面的かつ構造的なものへと深化させる学習環境として有効であることが示唆された。

7. 参考文献

- 1) 文部科学省(2008): 中学校学習指導要領音楽編. 教育芸術社, 東京, 165p.
- 2) 伊野義博・中村正之 郷土の民謡学習の意義と教材性～〈長岡甚句〉の授業実践から～. 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 2015, 第7号, pp.361-378
- 3) クリストファー・スモール(2011): ミュージッキング: 音楽は〈行為〉である. 水声社, 東京, 436p.
- 4) 田中耕治(2022): 新しい教育評価入門 [増補版]: 人を育てる評価のために. 有斐閣, 東京, 289p.
- 5) 小泉文夫(1994): 音楽の根源にあるもの. 平凡社, 東京, 364p.
- 6) 島添貴美子(2021): 民謡とは何か?. オルフェ・ライブラリー, 東京, 212p.
- 7) 志村文世(2006): 日本の風土と魂の鼓動 民謡. 野ばら社, 東京, 351p.
- 8) 深澤徹也(2024): 故郷の心を伝えるあの歌この歌 日本の民謡曲集〈全国編〉. メトロポリタンプレス, 東京, 379p.